

百人町教会

集会案内

礼拝：毎週日曜 午前10時半
 於 東京家政専門学校2階
 聖書研究会：第1・3水曜 午後7時
 於 石原宅

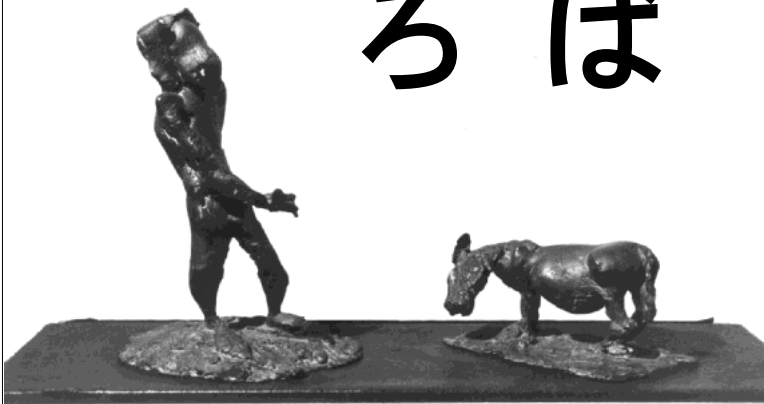
連絡先：〒162-0066 東京都新宿区
 市谷台町14-1-701 賈晶淳 方
 TEL/FAX 03-3351-0807

http://www.hyakunincho-church.com

郵便振替口座：00180-8-565379



ろば



私の目線（七六）

「人権の感覚」

今村 嗣夫

中谷訴訟の最高裁判所大法廷の弁論で「人権の感覚」ということについて述べました。著名な憲法学者宮沢俊義さんは「人権の感覚」というのは「自分の家族が、人権じゅうりんの取り扱いを受けて、憤激することではない」「自分となんのかかわりもない、赤の他人がそういう取り扱いを受けたことについて、本能的に、いわば肉体的に憤激をおぼえることである」というのです。そして、「国民の一人ひとり、ここにいうような意味の人権の感覚を固く身につけ、人権の尊重すべき所以（ゆえん）のものを身をもって体得するのになければ、ほんとうの人権の確立は、とうてい期待できないと思う」と指摘しています。日本軍従軍慰安婦の人たちの裁判で「人権の感覚」の鋭い裁判官の判決があります。

「従軍慰安婦制度は……徹底した女性差別・民族差別思想の現れであり、女性の人権を根底から侵し、民族の誇りを踏みにじるものであって、しかも、決して過去の問題ではなく、現在においても克服すべき根源的人権問題である」「帝国日本は、旧軍隊のみならず、政府自らも事実上これに荷担し、慰安婦とされた多くの女性のその後の人生までも変え、第二次世界大戦終了後もなお屈辱の半生を余儀なくさせたものであって……彼女らを実際限のない苦しみに陥れている」

このような、実際限のない苦しみに陥れている日本軍従軍慰安婦問題を初めて世に問うた故キム・ハクスンさんは「私が望むのは、日本政府の謝罪と国家的な賠償です」と訴えていました。また、日本のBC級戦犯者とされてしまったイ・ハンネさんは「それほど金額じゃなくても、私たちの人権を侵害し、人間としての人格をおろそかにした。そのことにちゃんと謝罪し、それが口先でないことを示す賠償であればいいと思います」。「謝罪と賠償は全く一体のものでございます。謝罪だけでもだめです。また、お金をもらったというだけでは意味がございません」。

ところで、昨年末に問題となった「慰安婦」日韓合意は、韓国政府が設置する財団に、日本政府が十億円程度を基金として拠出する」というものですが、日本政府は、この拠出金は元慰安婦への福祉支援（いわば生活保護）であって、「賠償ではない」と強調しています。それは「謝罪のしるしとしての賠償」ではないということです。「人権の感覚」に基づく解決ではないのです。

戦争責任

他から問われて感ずるものではない、
 自らに問うて意識すべき罪。
 忘れてあげようといつてくれなくても、
 時効にしてはならないもの。
 信頼の源。

権威について

ルカによる福音書二〇章一一八節

賈 晶淳

少し早いのですが、受難週に当たるとエルサレム神殿での活動箇所を選びました。今回は当時のイエスが置かれた環境を学ぶお勉強の時間したいと思います。

早速ですが一節の前半部に、イエスが神殿の境内で民衆に教えたという話があります。神殿でのこの教えは十字架につけられる数日前のことです。福音書にはイエスが教える場面が多く出ています。ガラリヤでイエスが教えていた場所は湖畔や野原が主だったと思いますが、意外に思いますが安息日の会堂での教えです。イエスはユダヤ人ですので子どもの頃から安息日になりますと会堂に行き、平日に行われる集会にも参加していたと思います。当時会堂は集会の場だけでなく、子どもたちの教育の場でもありました。環境がある程度揃っている家庭では子どもの幼い頃から教育を行い、大きくなるにつれて会堂で続けられます。例えば、五歳から聖書を学び、一〇歳でミシユナ、一三歳で掟、一五歳でタルムードを学ぶというものがあったようです。特に聖書が置いてある会堂では読むことを学ぶようになりますので大変重要な教育機関になります。このような教育課程を考えますと、一二歳のイエスが両親と共にエルサレム神殿へ上った時に境内において大人たちとの話し合いのなかで、「聞いている人は皆、イエスの

賢い受け答えに驚いていた」(ルカ二章四一節以下)という反応があります。神の子だから当たり前というより、こういった教育をイエスが受けていたとすれば状況理解の助けになるのではないかと思います。

会堂での催しは安息日の集会が他より重要であったと思いますが、百人町教会の礼拝と似ているところもあります。例えば、マルコではイエスが活動を始めてすぐの時期に会堂で教えたと書かれています(一章二一節以下)、イエスはどのような資格で教えることができたのでしょうか。イエスは律法学者やフアリサイ人でもありませんでした。会堂長がいましたが彼らは管理者で、教える者ではありませんでした。このことを逆から考えますと説教の独占はなく誰もが話すことができ、その上参加者同士での質疑応答があったということだと思います。ですからイエスのような新人でもユダヤ人としての教育を受けてきて、聖書を読める人でありましたら可能であったようです。今日の聖書の直ぐ前の一九章四八節の後半にも、「民衆が皆、夢中になってイエスの話に聞き入っていた」と人々が驚いている姿が描かれています。

会堂で行われる集会の内容について少しご紹介いたしますと、集会はシエマ(聞け)という申命記六章四節から九節の信仰告白を唱えることで始まります。

「4聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。5あなたは心を尽くし、魂を

尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。6今日わたしが命じるこれらの言葉を中心に留め、7子供たちに繰り返し教え、家に座しているときも道を歩くときも、寝ているときも起きているときも、これを語り聞かせなさい。8更に、これをしるしとして自分の手に結び、覚えとして額に付け、9あなたの家の戸口の柱にも書き記しなさい。」

ご覧の通りこの内容は神への徹底した思いと六節以下の聖書を如何に大切にするか、子どもたちにどう教え、伝えるかについての内容を告白するようになっていきます。ユダヤ人の信仰と一致する生活の徹底ぶりが何われまします。しかし、当時は今のような学校もなく、聖書のような書物も会堂にしか置いてない環境でこのような内容がどうやって徹底されていたのかについては、家庭での教育は暗記を中心に親から子へ、会堂では人々から聖書の読み方、解説をすることを学びます。もう一つ、当時の社会で使われていた第一言語はアラム語でしたので、ヘブライ語の聖書を読む時には聖書一節を読み、それをアラム語へ訳し、一般人の理解を助けたようです。もしこのようなことが正しければ会堂でのイエスは両方の言葉を行使でき、時々使われるアラム語の表現も納得できます。

次に、今日の箇所の一節の「我々に言いなさい。何の権威でこのようなことをしているのか。その権威を与えたのはだれか。」というところは今回の証詞の題とも関連しますが、

このことを言ったのは一節の後半に記されている、祭司長、律法学者たち、長老たちです。これらの人々こそ当時のユダヤ社会における公認された権威の持ち主たちでした。しかし、彼らはイエスの教えや奇跡などによって自らの権威が脅かされていることに憤慨し、表面的には社会的秩序云々と言いながらも内実では強い危機感と妬みによるイエスの殺害を狙った問いでありました。

今回はこのイエスの権威についてよりも、当時のユダヤ社会において公認されていた幾つかの権威について一緒に考えたいと思います。当時の権威と言いますとそのトップにはエルサレム神殿の大祭司とそれに続く祭司長、祭司たちがいました。これらの権威はバビロン捕囚帰還後の第二神殿の時代から確立した権威でローマによって神殿が破壊されるまで続けられたものです。そして、祭司に近い権威にはサドカイ派の人々がいました。彼らは祭司階級から発生した貴族階級です。その他に共同体などを代表する長老がいます。そして、律法に関連する権威として律法学者と律法の実践を重んじるファリサイ派の人々がいました。洗礼者のヨハネやイエスのように預言者などに見なされていた人もいました。これらの権威についても少し詳しく検討したいと思います。先ず律法学者のことで、彼らは律法を研究し教える立場にいます。本来は祭司階級から出発した人々で、バビロニア捕囚帰還後、エルサレムで神殿と

祭儀の再建が行なわれましたが、国家権力である王権はペルシアによって認められませんでした。そこで社会の秩序を確立するために律法が強調されるようになります。しかし、当時律法学者という専門職はなく祭司がその役割を兼ねるようになります。ネヘミヤ記八章九節には、「総督ネヘミヤと、祭司であり書記官であるエズラは、律法の説明に当たったレビ人と共に、民全員に言った。『今日は、あなたたちの神、主にささげられた聖なる日だ。嘆いたり、泣いたりしてはならない。』民は皆、

律法の言葉を聞いて泣いていた。」と帰還後の祭司的指導者であったエズラが祭司と書記官（律法学者）を兼ねていたことを記録として残しています。そして、人々が祭儀だけでなく律法に関しても大喜びで受け入れていたことが記されています。

次に、私たちが聖書でとても馴染んでいるファリサイ派の人々がいます。彼らは福音書では頻繁に登場していますが、何故か旧約聖書では一切登場しません。と言いますのはユダヤ人社会での彼らの歴史はまだ浅かったということですが、彼らが登場する歴史的な背景について少し調べてみました。捕囚帰還後暫くはエルサレムとパレスチナはペルシアが宗主国でありました。このペルシアの時代を終わらせたのはマケドニアのアレクサンドロス大王です。しかし、大王は間もなく死去、帝国が三分割する中、セレウコス一世によるシリヤ王国が前三一二年に成立し、パレスチナ

はこの支配の中に取り入れられギリシア時代が始まります。サドカイ派はこの時期に発生した祭司、貴族などによる思想集団で、死者の復活や死後の世界を否定し、ギリシアやローマなどの征服者と妥協する合理的な立場で、ファリサイ派とは対立的な立場にいました。

ファリサイ派はこの時代に征服者が神殿祭儀を侮辱することに反発し、地方の祭司であったマカバイ兄弟が抵抗と独立戦争（前一六七―一六〇年）を起した時に、律法を中心に侵略者とは一切の妥協を拒否し、マカバイ戦争に協力していたグループでありました。それ以来彼らが律法を厳格に守ることで民衆から支持を得るようになったようです。戦争は勝利し、独立王朝であるハスモン朝（前一四〇―三七年）が成立します。聖書の続編にあるマカバイ記はその記録です。しかし、この律法に対するファリサイ派の厳格な態度は余裕があつてこそ可能なことで、下層民であるアム・ハアレツ（地の民）と呼ばれていた人々には日々の糧を得るため安息日を守る余裕すらありませんでした。地の民にとって律法は重荷となり、その基準では罪人にならざるを得ませんでした。よく見るとそれまでの権威は地の民の抑圧の上に建てられたものです。しかし、イエスの公生涯は地の民と共にし、彼らの重荷を共に背負い、贖う道を歩みました。地の民にとってイエスの教えは驚きであり、イエスの歩みは真の権威でありました。

（二〇一八年二月一八日証詞より）

出身教職だより

雲の柱、火の柱を目印にして

小林 明

二月九日(金)平昌オリンピックの開会式をテレビで観ていました。一連の民族的なパフォーマンスがあり、選手入場、そして南北統一チームが手に持つ統一旗を見た時は「平和って良いな」とジーンとシビレました。

僕が百人町教会の礼拝へ参加させていたかどうかようになったのは、昭和天皇が下血して亡くなり、ベルリンの壁が崩壊する一九八九年の前年頃からでした。当時は、新大久保駅近くの矯風会館で礼拝が行われ、礼拝は輪になって行われていました。そして礼拝で語られる説教やお話に関して、昼食を挟んだのち質疑応答が行われました。「お話」は、準備が足りない場合は容赦なく準備不足の部分を責められる。発題者の返答も思いや気持ちだけという場合は、聞いている方が「これはヤバイかも」と心配します。立教大キリスト学科の学生さんが発題する場合は、木田猷一先生が容赦なく時代背景や具体的な根拠の裏付け資料を聞かれる。また、今村さん、小池健治さん、権田倫子さん、掛井五郎さん、前島さん、趙容来さん、他…。こんな怖い人たちの前で毎週の礼拝が展開されていた。優しさや愛はあったかもしれないですが、今思うとゾッとする場でした。その礼拝が終わってもまだ、大久保通りに面する二階の喫茶店で話の続きが行われていました。夏の修養会でも、

昼過ぎに到着すると渡辺重夫さんがウイスキーを鞆から取り出し「なんだお前飲まないのか」から始まり、二泊三日は、ゲームに発題、何でも真剣勝負のようで大変楽しかったです。僕も何度も怒られながら、失敗も幾つかしました。でも皆様に育てられたなど本当に感謝しています。

先日、一月二十九日に石垣島ツアーへ一泊二日だけ参加させていただきました。数時間一緒にいただけですが、親しみを皆様から受けました。なにか今も百人町教会に毎週通っているようなそんな気持ちになりました。皆さんの、ちよつとだけ歳を召したお顔を見ながら一緒に参加した八重山中央教会の礼拝に感動しました。

現在の状況

大阪難波の母が営むカウンターだけの居酒屋を手伝う理由で大阪へ帰ってきたのですが、母は、まあ何とか大丈夫でして、毎日ビールと煙草をやりながらお客さんに愚痴を聞いてもらっています。私の主な仕事は、換気扇や蛍光灯の掃除です。お店は手伝っていません。

平日は、日本基督教団部落解放センター(事務所・大阪府大東市)で朝九時〜一七時迄働いています。牧師として大阪生野教会へ日曜日に朝九〜一三時だけ行っています。前は水曜祈祷会をしていたのですが、今は会員の入院などがあってやっています。一釜ヶ崎・木曜夜回りの会」と「辺野古に基地を絶対作らせない大阪行動」毎週土曜日一五時半〜一

七時へ参加しています。何とか休みを三〜四日取れた時は、沖繩辺野古へ行つて「基地ゲート前」の座り込み行動に参加しています。また、大阪釜ヶ崎の象徴でもある労働福祉センターが、今年にも閉鎖されようとしています。日雇い労働者にとつて大変重要な建物です。大阪府・市が進める西成特区構想では邪魔だとして、商業施設に建替えようとする西成区役所などに抗議行動をしています。今後の展望は、どうなるのか考えていないですが、これからも頑張っていきます。憲法改悪反対。自衛隊・在日米軍基地建設反対。自由、平和、平等を守りたい！これからもどうか皆さん元氣でお過ごしください！石垣で会えなかった皆様もどうかお元氣で。神様からの豊かな祝福と健康を祈っています。

(大阪生野教会牧師・

日本基督教団部落解放センター(主事)



石垣島にて

白髪になるまで背負っていつ

イザヤ書四六章

笹淵 いづみ

私共は笹淵が八八歳、私は八〇歳となり、まさに白髪となり足も耳も弱くなりまりました。沖繩に来て石川教会五年、石垣島の一年を合わせるとはや一九年となります。裸で母の胎を出て、もうすぐ裸でそこに帰る日々ですが振り返ると、一瞬でもあり、又数知れぬ喜・悲・苦・悔の繰り返しでした。しかし今は主が私を贖い救い背負って下さったことを深く深く感謝する毎日です。

一月末より四日間、寒さ厳しい時に、母教会である東京の百人町教会の長年の信仰の友々が約二七名石垣島に来島して下さい、私の長寿を祝い、又石垣の教会で礼拝を持つことができました。賈牧師の司式で「栄光の回復」イザヤ書三五章より御言葉を頂き、夫の愛唱歌を「よろずの民喜べや・」と唱和しました。なつかしい顔・顔、その瞬間「私の名によって集まるただ中に私はいる。」の声が響き、「ここが天国なのだ確信しました。

五四年前の結婚式で浅野牧師より贈られた聖句は「人は心に己の道を考え計る。しかしその歩みを導くものは主である。」箴言の教えは真実です。父母の伝道に伴って大阪より中国大陸へ静岡の開拓伝道へ農村伝道神学校、戦中戦後の餓死寸前の経験もし爆撃にも会いました。父は片足になりましたが、晩年私は自分は神の愛を多く説いてきたが大切なのは

悔い改めだと語り、母は祈りは行動なのよ、と身をもつて示し五四歳で病死しました。その後美竹教会で笹淵と出会えた事は神様のお導きと思います。結婚後の子供の死と夫と話し合いながら歩んだ農伝への転職へ新島短大創立期の仕事へ夫の牧師試験合格へいずみ教会牧師一二年そして沖繩へと導かれました。

日本の教会混乱期の約五〇年前、美竹教会より分かれ百人町教会が発しました。木田先生の主体性の確立やあがないの運動、阿蘇先生の信仰の実践、蚕室中央教会との連帯、賈先生の牧師就任。私共会員は数多くの指針を与えられ共に歩んだ自己検討の日々、その恵は計り知れません。私は朴軍事政権下の第二回の韓日合同修養会に参加した折、お別れの時長老の方が、「信仰によってお互いに許し合いましよう。日本で憲法を守り戦争をしない国にして下さい。」と語られたことが行動の原点になりました。そして大阪時代に部落解放委員となりました。そして差別を受ける人の苦しみと、人間の心に潜む差別心の恐ろしさは一言で書ききれません。この事は沖繩に住んで続けて経験しています。これ等を通し、私は自分の知っていることはほんの一握りである、正しいと思つて自己中心的に傷つけ合う、この罪を繰り返す私達人間に、イエス様は「私が目を向けている所をよく見なさい」と今論されているのだと思います。現実の石垣島は今大変な時期を迎えています。国は防衛をたてに与那国島、宮古島を攻

略し、今は石垣島に自衛隊基地を置こうと躍起であり、三月の市長選挙に向け島を二分しています。島民が開拓した農地四六ヘクタールにミサイル基地と爆薬庫の具体案まで示しこの選挙が石垣を大きく変えるでしょう。今回の礼拝で、戦争体験を悲痛に語って下さった石垣正子姉の声がまだ耳に響いています。私の庭に今キジが来て琉球コマドリと合唱しています。砂漠に花が咲き平和でありますように祈るばかりです。

笹淵 昭平

百人町教会の方々が、遠い日本のはずれの石垣島まで訪ねて下さったことは、まことに嬉しい有難いことでした。お訪ね下さった方々に心より感謝申し上げます。

さて約五〇年前にこの教会が発した時に参加した者としてあらためて思い起しています。百人町の人々が最初、東京渋谷の美竹教会に属していましたが、この教会は常時礼拝出席が二百名以上でした。この大きな教会がいくつにも分かれました。それには色々の原因がありました。それは、当時の主任牧師であった方が東京神学大学の教師をかねておられました。その東神大に紛争が起こりました。当時大学紛争が盛んで、多くの大学がもめていました。若い人たちが心の不満を世に訴えていたのです。大学当局の多くが学生の運動をやめさせるために機動隊を大学に入れ

て、紛争を解決しようとはしました。東神大も機動隊を導入し大学紛争をやめさせました。神学大学は教会で働く牧師を養成する大学であります。その学校に国家権力である警察を入れることは教会を国家に従属させることであるとして、そのことにNO!を主張したのであります。

教会は神様が作られたものであります。そのことをあえて強くこの機会に申します。では現在の日本の状況は、日本の教会はどうでしょうか。今生きている信徒一人一人は何をすべきかを深く考えるものです。

(二〇一八年二月二一日 会員日誌より)

石垣島訪問記

ずっと繋がっている

小島 悦子

大学紛争が盛んだった六十年代の終わり、授業はほとんどなく私は居場所を探していたのだと思う。紹介された美竹教会へ初めて行った時声をかけて下さったのが笹刈昭平さんだった。聖研に誘って下さり、聖書はほぼ初めて読むのにその話し合いがとても楽しく、休まず参加するようになった。

今回、石垣島の笹刈さんご夫妻を訪ね、美竹を離れ大久保集会として出発したメンバーの多くが聖研メンバーだったことが改めてわかった。その中のNさんが、他の集会などにも誘って下さったが、教会の狭い和室で開かれる聖研は人数も多くなくとても居心地よか

ったのだ。笹刈さんは、自宅にも招いて下さり、田無のお家にも何回か遊びに行かせてもらった。貧乏学生だったので帰りにキセルをしようとしたら「そんなこと止めなさいよ。」と叱られ恥ずかしかった。

昭平さんとNさんと三人で牛久教会のキャンプドールサービスに参加したこともあった。その頃美竹教会は分裂の瀬戸際で深刻な話し合いを重ねていたのだろうが、私は全然自分の問題として理解していなくて、ただ初めて経験する教会の行事が楽しかった。そして、小学校教員の仕事が決まった時、深く考えることもなくキリスト教とヒューマニズムをこっちやにしてH先生から洗礼を受けた。笹刈いづみさんが教友になって下さった。昭平さんから受洗にあたって「聖書を読むこと」「教会へ行くこと」「交わりを大切にすること」を教えられた。「教会は国家権力に従属してはいけない。」との昭平さんの言葉に力を得て、私も若い頃は職場で君が代・日の丸に反対したこともあった。

笹刈さんご夫妻が高崎に行かれる時お世話になった私は悲しくてたまらなかったが、沖縄本島にお訪ねした時や創立四十周年で東京にいらした時そして今回、変わらないお二人の姿勢に接して、離れていてもずっと繋がっているんだとの思いを強くした。十六年前、辺野古の海岸で共に祈ったことを思い出す。今回案内してもらった自衛隊基地候補地のサトウキビ畑を守ることはできないのだろうか。

出合いの旅

菅野 俊美

笹刈さんご夫妻に初めてお会いしたのは美竹教会の聖書研究会(聖研)に出席した時で、もう五十年以上前になる。共に読む聖書の学びを通して導かれ受洗に際しての教友は、いづみ夫人だった。その後私は神南集会(現在所属する新泉教会の前身)に参加、間もなく笹刈さんも大久保集会を始められたので、以後お会いする機会は殆どなく、今回誘われた時は参加を即答した。百人町教会の皆様とは初対面の方も多かったが、信仰を一つにする仲間なので不安はなく、ご夫妻との再会にワクワクドキドキの気持ちと共に、阿蘇道子さんの「人間なら誰でも参加していいよ」の言葉に一層安心する旅の始まりだった。

初日の夜、数名で笹刈さん宅に伺い、いづみさんの元気な声に迎えられた。私は何十年振りかの再会であったが、すぐに美竹・聖研時代に引き戻された。年を取り姿は老いたが、心まで老いてはいなかった。当時ご夫妻は聖研のリーダーとして引つ張って下さり、地方教会訪問の旅にも何回か行ったが、長島愛生園で共に礼拝を持ち、西瓜を食べた時のことは忘れられない。その当時より尚一層お元気に話されるいづみさんの訴えは、私達に沖縄の現状を伝えたい熱い思いがほとばしり、時間の経つことも忘れた。

翌日は八重山中央教会を訪問し賈先生のもとと礼拝。増田牧師から教会設立の歴史を伺い、

教会員の方の実体験をお聞きして、沖縄戦の悲惨を実感する。参加者全員が自己紹介と現況を話し、今回のツアー目的達成の時だった。全員のお名前と顔が一致して余計に親しみを感じ昼食会場に向かうと、昼食時だけ参加のご息女のぶ子さんが待つておられた。食後、島内に建設予定の自衛隊敷地を廻り、海には海上保安庁の船が停泊しているのを間近に見て、今も沖縄八重山は戦争の危機に瀕していることを実感した。三日目の夜もご夫妻を訪ねたグループがあり、いつまでも名残りのつきない旅と出会いであった。

各々の旅はこれからも続くが、様々な出会いがあり、充たされたこの四日間！賈先生はじめ百人町教会の皆様感謝いたします。

*青春に戻る旅寝や冬銀河
*忘れまじ沖縄を聴く冬の旅
*星の砂寄せて広がる冬渚

オキナワリヨコウノタノシカツタコト♥
ひろさわ まなみ

① はじめてひこうきにのったこと。
② (石垣島で) カンムリワシをみたこと。
③ (石垣島で) うみにはいったこと。つめたかったけど、きもちよかったし、うみがきれいでした。
④ (竹富島で) ほしずなどかいがらをひろったこと。
⑤ (由布島の水牛車で) すいぎゅうのゆうせいくんはあたまがよかったです。

⑥ (石垣島の満月の夜) つきがきれいでした。
⑦ ジュースをのんだこと、うたい、おどりがつきをならしたこと。
⑧ みぎよんさんとママとおなじへやで、愛実がリーダーをしたこと。

石垣記念旅行 高島 紗綾

今回は、愛実の卒園と自分の生誕四〇周年を記念しようと参加しました。出発前二人してインフルエンザとなり、参加が危ぶまれたが、休養に全力を注いで旅行にピークを合わせることができました。

少し前から、四〇歳を一つの区切りとし、続くLifeをどうしようか考えていました。そこで選んだのが養育里親への登録でした。百人町で高瀬さんと出会い、八王子に引越し、働き方を変えるという流れのなかで、そうなったという感じですが。登録後に高瀬さんにこのことを伝えたところ、百人町の中で高瀬さんより先に里親をやっていた先輩がいて、それが笹渕さんであることを知りました。そこで、先輩方がそろそろ石垣島で里親登録したことを皆さんにシェアしようと思いました。ところが、なんと高瀬さんがフライング(笑)、(笹渕さんが通う教会での自己紹介の順番の都合上、結果的にということですが) 新たに里親登録をした人がいると発表、あわてて補足をすることになりました。期待を裏切らな

い展開でしたが、笹渕さんを含め、皆さんにもスタートラインに立ったことをシェアでき嬉しく思います。さらに、参加されなかった皆様にはこの紙面をもつてご報告とさせていただきます。



八重山中央教会にて二〇一八・一・三〇 ※カラー写真はホームページでご覧ください。

DVD紹介

「Born Again」画家正子・R・サマーズの人生

今から少し前の昨年一〇月、家庭集会では賈牧師の推薦で表題のDVDを見た。

二〇一六年九月に八八歳で亡くなった沖繩育ちの正子さんは過酷な運命をたどった人。四歳の時父親によって遊郭に売られた。そこで育てられた「ジュリ」と呼ばれる女の子たちは、芸事や礼儀作法を仕込まれ成長すると客の相手をするのが仕事。

第二次大戦の末期、本土を守るために激戦地となった沖繩では多くの命が失われ、戦後は米軍基地が作られた。混乱の中を生き延びた正子さんは米軍基地で働き始めた。そこに遊郭の雇い主があらわれて「まだ借金が残っている」と言うが、正子さんは懸命に働いて借金を返済し、ようやく自由の身になる。

やがて米兵と結婚した正子さんは沖繩を離れ米国・アリゾナ州に住む。アリゾナは地図で見ても茶色っぽくて荒涼とした土地を連想させるが、正子さんにとっては過去と決別し希望をもって前進する新天地だったかもしれない。その地で正子さんは絵を描き始める。「砂漠の女流画家」というとジョージア・オキーフを思い出すが、オキーフもアリゾナ州の隣ニューメキシコ州に長く住んだ。はつきりした色彩と大胆な構図がオキーフの特徴だが、正子さんの絵はやわらかく温かみのあるものが多い。同じような風景を見ても人の感

性はそれぞれ違うのだと思わせられる。

米国に移住してからも平穏な生活ばかりではなかった。最初の夫とは離婚、子供には恵まれなかったので養子を迎えシングルマザーとして育てる。その後、別のパートナーを得る。晩年、正子さんは英語で自伝を書き、それをもとに作られたのが今回のDVDである。

正子さんはどんな状況に置かれてもくじけなかった。子供のころから、人には言えない苦しみ、悲しみ、屈辱感、悔しさ・様々な感情を味わい尽くしたと思う。本当は忘れてしまいたい過去を、なぜ自伝として残したのかと考えてみた。同じように悲惨な生活を強いられた女性たちが、訴えることもできず黙って死んでいったり、過去を隠してひっそりと生きなければならなかった事実を書き残しておきたいという強い思いがあったのではないだろうか。激戦のさなか首里城の地下に避難した正子さんは、そこにも慰安所があるのを目撃した。戦後、彼女の証言により、その事は首里城の案内板に書かれた。しかし反対する人々もあって「慰安所」の部分は後に削られたという。正子さんの自伝が出たことよって再度、事実を書くべきだということも言われている。

戦争中、アジア諸国そしておそらく日本国内でも、軍が留まる所には慰安所と呼ばれる場所があり、多くの女性が犠牲になっていたのだろう。戦争に伴う悲惨な歴史の繰り返しは現在も続き、その上に今の社会が成り立つ

ていることを忘れないようにしたい。

正子さんの自伝は「沖繩からアメリカ 自由を求めて！画家 正子・R・サマーズの生涯」として高文研から二〇一七年に出版されている。

(榎本 征子)

ろばのせなか

一月末から三泊四日で石垣島へ。直前にインフルエンザと骨折のため二名の方が参加できなくなったのは残念でしたが、総勢二五名が無事に旅を終えたのは、計画の段階から最後まで力を尽くして下さった賈牧師・小川ひとみさん、そして連絡係やレンタカーの運転などを分担して下さった方々のおかげだと感謝しています。

草創期の大久保集会（百人町教会）を導き支えて下さった笹淵ご夫妻との再会がかないしました。八重山中央教会をお借りしての礼拝、その後に教会員の方の戦時中のご苦労や、教会の歴史を伺うことができたのも貴重な経験でした。昭平さんの米寿、いづみさんの傘寿を共にお祝いする嬉しいサプライズもありました。

今村さんが「目線」で書かれた「人権の感覚」とは「人の痛みを感じる想像力」ということでしょうか。私達本土に住む者に代わって石垣の人々と共に平和への闘いを続ける笹淵ご夫妻の姿勢に、まっすぐな道を歩んでこられた強さを感じます。

(榎本 征子)